

## 黒石市における黒森学校についての研究

渋川良夫 西目屋村立西目屋小学校

### 要 旨

黒石市に存在したといわれている黒森学校は、当時としては交通不便な場所にあったが県外からも多くの人を訪れた。僧侶が教え、独特の教授の仕方があったといわれている。昭和19年に寺が焼失し貴重な資料の多くを失ったが、文献を調べることで当時の様子を知ることができた。黒森学校は多い時には、100名を越える寺子がいるとともに、卒業して政治や経済、文教面で活躍する多くの人材を輩出した。基礎的・基本的な事項の徹底は現在の教育にも通じることも多い。文献の収集や聞き取りを今後さらに行うことが、黒森学校を把握するための課題として挙げられる。

【キーワード】 寺子屋教育 黒森学校 庶民教育 読み・書き・算盤

### 1 はじめに

青森県教育史<sup>1)</sup>を見ると、近世教育史上、庶民教育、とりわけ寺子屋や私塾が庶民教育機関として果たした役割は大きい、その中でも代表的なのが寺子屋である。寺子屋は、庶民の文字学習へのはげしい要望によって庶民が自ら組織した自然的な教育機関であって、天保年間(1830~43)から慶応年間(1865~68)が全盛期であった。

私塾や寺子屋の学習内容についてみると、読み・書き・そろばんがその中心であったが、商業経済活動や文化活動の交流がはげしさを加えるにつれて、商売往来のような往来物が全国的に使われた。また、「いろは」にはじまる全体の学習課程を他所の寺子屋と歩調を合わせて教えようとする動きが高まった。寺子屋の普及によって多くの庶民が文字を知り、文字の有用性を悟って日常の生産活動や生活のなかで自由に活用できるようになったことの意義は小さくない。明治維新を契機として成立する小学校の基盤は、こうした寺子屋教育によって培われたといえる。

青森県においても、全国的な動向と歩調を合わせ、数多くの私塾や寺子屋が設立された。全国的な学制がなかったため、設立者が任意に教則を定めて自由に教育をすることができた。寺子屋を終えても、現在の卒業証書にあたるものはなく、何らの社会的特典も与えられなかったが、習得した知識は、そのまま実生活に役立ちその意義も大きいといえる。やがて、学制の発布により寺子屋は姿を消していくが、それまでの中心的な庶民の教育の中心であった存在は大きいものであったといえる。

黒石市に存在したといわれている黒森学校は、当時としては交通が不便な場所にあり学校を設立するには良い条件ではなかったと言われているが、それに反して多いときには100名以上も学んでいた。独特の教授の仕方やその学校の運営の仕方にも特色があり、県外からも訪れる人もいた。また、黒森学校から東奥義塾に進んだ人や県内で活躍した人も多いという。僧侶が師匠になり、読み、書き、算盤を教えていたが生活と密着したことを教授し、基礎的・基本的な事項を徹底していたことは現在の教育にも類似している所も多い。

学制以後も、私立学校として存続し続けへき地に在りながらもその存在は地域に貢献していたように思われる。

ここでは、黒石市の黒森山にあったといわれている黒森学校を調べることを通して当時の寺子屋教育が果たした役割や意義を考察、検討していきたい。

## 2 研究の目的

本研究は、黒石にあった黒森学校の教育における歴史的な意義を考察していく。

## 3 研究方法

研究にあたっては、黒森学校に関する文献を調査することを通して検討をすることで研究を進めていく。

## 4 青森県における私塾、寺子屋教育

青森県には、全盛期には寺子屋が15, 500余りがあるといわれているが、実際にはその2倍以上の寺子屋が開設されたと思われる。寺子屋は、そのほとんどが1教室・1教師制であり、かつ経営者と師匠が同一人物の場合が多く、普通2, 30人から4, 50人の児童がいたことが分かっている。入退学は全く自由であり、年齢も決まっていなかったが、男女とも5, 6才で入門し、4, 5年間通学した。

寺子屋も私塾と同様、全国的な学制がなかったため自由に教育することができた。中心教科は、読み・書き・算盤であり、学習時間も大方は午前8時ごろから午後2時ごろまでであった。寺子屋で習字用または読本用の教科書として、ひろく用いられたのは往来物である。往来物は、平安時代の後期にその発生をみ、以後、中世を通じて約50種つくられているが、近世には、地域社会の構造、機能、様態などに応じて1, 993種の往来物がつくられたという。その内容も、教訓科、社会科、消息科、産業科、地理科、理数科におよんでいる。各寺子屋はこの中から、数種あるいは数十種類選んで使用したようである。

往来物は、時代や地域の要求に応じて新作され、あるいは改訂されていったが、青森県の場合をみても津軽地区独自のものとして、「十三往来」、「弘前往来」、「中野詣」などがあったといわれている。往来ものを手本とする習字は、寺子屋教育の中核とされ、手習うことを通して読むことを目指し、かつ、手習い、読むことによって庶民が日常生活や生産活動に必要な知識や技術に関する文字を理解し、道徳的な素養を身につけていったのである。女子を収容した寺子屋の中には、読み・書き・算盤の基本的な教科のほかに裁縫、茶道、華道、はては絵画、舞踊等、女子にまつわる「たしなみ」を教授内容に編みこんでいたものもあった。月末や年末に試験をしたが、前者を小さらいといい、後者を大ざらいといって暗書などをさせた。教授方法は、個別教授を主体としたが、上級生の優秀者が助教となって下級生の指導をしたり、級分けをして寺子同志の向学心をあおるなど種々の方法がとられた。師匠は厳格な態度でのぞむことを常とし、校則に反する寺子に対しては体罰を加えたりする場面もあったが、師弟間の信頼関係は極めて厚く、寺子を去っても終生変わることがなかった。当時は、寺子屋を終えても社会的特典もあたえられなかったが、寺子屋において修得した知識は、そのまま実生活に役立っていた。

## 5 黒石市の寺子屋教育について

江戸時代中期以後、商業がさかんになるにつれて、町人だけでなく農民も文字を中心とする知識が必要になった。それは、店へ奉公するときもいわゆる読み・書き・算盤が求められたからである。このような社会の要求が江戸時代後期に寺子屋を激増させた。黒石で

も21の寺子屋が開設された。<sup>2)</sup>

小野川塾は、神明宮（黒石市前町）の神主小野川遠江・速瀬父子によるもので、享和三年（1803）の開設である。読み書きだけでなく、神道の初歩や礼法も教えた。町方だけでなく農村の山形・浅瀬石・六郷（ともに黒石市）から寺入りするものもあり、最盛期には200名の寺子がいた。また、他の寺子屋に比べて女子が多く学んでいたのも、これは女子教育に力を入れたためである。山内多門は、黒石領小湊（東津軽郡平内町）からわずか8歳で学びにきいるので、規模も大きく評判も高かったといわれている。寺子たちは、自ら「青雲舎門人」の称して誇りを持ち、寺子屋を出てからもお互いに切磋琢磨したといわれている。神明宮境内には、明治三十九年（1906）建立の「故師匠小野川遠江 小野川速瀬 神霊」の石碑があり、100人以上の人名が刻まれている。

佐藤塾は、八幡宮の神職佐藤河内・麻賀喜・金吾と三代にわたっていた。文化十二年（1815）、河内が小野川塾にならって開設したものである。その子麻賀喜は小野川遠江に神道と皇漢学を学び、黒石藩榊波衛に易経を学んでいる。学習内容は、読書・習字で、寺子は町方のほか、農村では光田寺、常盤から70人が集まっていた。稲荷神社（黒石市甲大工町）境内にある大正五年（1916）建立の佐藤翁碑には58名の名前が刻まれているが、これによると、明治二十六年（1893）に死去するまで1000人以上に教えたとある。この中には黒石の商人として活躍した人もいる。弟の金吾は兄を助けて塾の経営にあたり、明治六年、黒石小学校の開校にあたり教員となっているので、このときで塾は終わりをあげている。神職屋敷は稲荷神社の北側にあり、今でも「日本書紀」「唐宋八家文読本」等塾で使用した教本とみられるものが残っている。

珍田塾は、明治初年、弘前藩士珍田有孚が浅瀬石に在村して開設したものである。学習内容が高度で、ここで皇漢学を学び、長利塾（弘前市）へ進んだものもある。寺子は10人くらいであった。明治7年、浅瀬石小学校開校にあたり、珍田は校長となり、塾生は生徒になった。長男の珍田捨己は外交官として活躍した。

黒石の寺子屋の塾主は、武士が多く、神官、僧侶、医師、庶民もいた。就学の年齢は決められていないので、早ければ7、8歳、普通は9、10歳で寺入りし二、三年学んだ。このとき、父母が寺子の数だけ饅頭、あるいは餅、菓子、赤飯を用意し、師匠は、寺子にこれを配り、侮辱や喧嘩がないように訓示した。教科本は、次のものを使用した。1年目は、「いろは歌」、「寺子屋状」、「物草状」、「商売往来」。2年目は、「今川往来」。3年目は、「実語教」、「童子教」、「庭訓往来」、「孝経」。4年目は、「中庸」、「論語」、「詩経」、「礼記」、「唐詩選」、「文選」、「文章軌範」と年次が決められていた。読みは、出席を確認後、全員が着席座し、教えられた本を一斉に朗読する。読み終わると師匠や学頭が正しい読み方を示したり、読本の解釈をし各自で自習をする。習字は、師匠が書き与えた手本を見ながら手習いし、師匠か学頭が見て直し、算盤は、加減乗除の四則で、三年以上になると、2倍や2で割ることを教える。音楽的なものとしては謡曲、体育的なものとしては相撲、徒歩競争、力試し、雪合戦、輪回し等である。農村部では、草履やわらじをつくらせたり、鋤柄の修理を教えた。

始業は、朝食後にやってくるので、午前7時過ぎであり、10時ごろから2、30分休み、昼食は1時間であった。午後は、中間に休みをとり、4時に師匠が退散を告げている。休みは、毎月25日の菅公祭の時は、前日に半紙を継ぎ合わせて、文字をできるかぎり大きく書き、神社の屋根よりも高くなるように掲げた。これが「大文字」とよばれた。黒石では、小学校が開設されてから、町をあげて神明宮に集まり大文字を掲げ、上手であれば賞に選ばれ半紙が与えられた。その他、鎮守祭、岩木山や猿賀神社の祭礼には休日となった。長休みは、盆休みが12日から20日、正月が12月25日から1月10日である。

素行、成績の良い者は、学頭として寺子の指導にあたった。怠けて読み、書き、作文を

忘れ、他の寺子を誘って悪事を働き、家業を手伝わないものは、父母を呼び出し破門にされた。謝礼は年末に裕福な家で白米一俵（約60キロ）、中程度の家で二斗（約30キロ）、それ以下は一斗から五升（約7.5キロ）を贈った。盆、正月、五節句には樽代として銭二匁から二十匁、その他秋餅、季節の産物を届けた。町方では、月に六匁、盆、正月に三匁を贈った。寺入りの時は酒二升に魚類、菓子添えて贈ったという。

女子の教育については、8歳から12、13歳くらいでしたが「女大学」「今川礼儀作法」等を別の部屋で教えていたという。

## 6 黒森学校について

### 6-1 黒森学校の概要

黒石市の北方に標高606メートルの山があるが、これが黒森山である。この中腹にある浄仙寺に開設された寺子屋は、黒森山の学校といわれて南黒地方はもちろんのこと、全国的にも極めて特異な存在であった。<sup>3)</sup>浄仙寺を開いたのは山崎是空である。山崎是空は、黒石市鍛冶町の鍛冶屋山崎九兵衛の子として生まれた。黒森山にこもってからの是空は、単に自分が修業するのみならず、青年に法話を説き、地に文字を書いて教えた。これがやがて口から口へと伝わり、是空を訪れる子弟が増えていった。黒森山の学校の経営期間については、色々な説があるが、二代目寂導の代に入って隆盛を極めたようである。

寂道は、是空から仏学儒学の指導を受け、のち養子となったが、寂導の代には、寺子は黒森山下の諸村のみならず、津軽地区はもちろんのこと、遠く北海道や秋田方面からも入門するものがあり、常に4、50名から100名の寺子があったといわれている。

三代寂静（寂浄とも書く）が三代住職となったのは明治7年1月であった。寂静の時代には、十二間の大講堂が建てられた。

黒森学校の経営内容をみると、まず第一に通年制をあげることができる。入学や卒業は自由であり、随時寺入りができ、1、2年からまれには10年間も継続するものもあったといわれている。第二には、距離的にも通学が不可能であったために入門の際、各自机を持参して寄宿したこともあるといわれている。人数が多かったために、1日米を1俵食したとも伝えられている。第三には、入学年齢に制限がなく、8、9才から20余才までの青年まで入門したことがあげられる。第四は、学習程度が比較的高かったことである。「日本教育史資料8」には読書、習字とあるが実際は人間的修練に重点が置かれており、一般の寺子屋終了後に改めて黒森学校に入学するものもあったといわれている。

黒森山の学校の特色として永続性があげられる。経営期間にはいろいろな説があるが、文政末年（～1829）から大正初年まで4代にわたって80数年間継続したものと思われる。束脩は不明であるが、なにしろ多人数を寄宿させたわけだから生活費位は徴収したものと思われる。

入門者数については、「日本教育史資料8」<sup>4)</sup>は明治元年の調査として男15人をあげているが、「学制頒布五十季記念寺子屋号」には「明治20年前後を最盛期とす。冬7・80人、夏30人位就学生あり。」とあり、その他、40、50人から100人「みちのく双書青森県教育史下」、約100人「青森県人名事典」などの説がある。

明治に入ってから黒森山の学校は、私立小学校となって子弟教育を継続した。当時、公立小学校を敬遠してわざわざ黒森山の小学校に入学するものが多く東奥義塾設立後は、ここから進学するものもあった。私立小学校となつてからの経営内容を物語る資料はないが、明治22年5月2日付けの東奥日報に広告が掲載された。当時の新聞にも掲載されている。（資料1）

表1 東奥日報掲載内容

<p>今般私立学校許可去月廿八日開校式を執行せり</p> <p style="text-align: center;">南津軽郡南中野村 黒森山浄仙寺住職 私立学校設立者 平野寂静</p> <p>南津軽郡黒森山に在る浄仙寺にては従来より子弟を訓導するを勉めしか去る明治十一年小学校を設け益々教育に従事せしも二十年尋常設置小学区域改正の爲め廃せられ翌二十一年大川原村を以て二十九学区と改められたれとも資力乏しくして学校を設けざりしか今回該山の住職平野寂静氏奮発して私立学校を設くるの許可を得本日の広告にある如く去月二十八日開校式を行ひ同郡長土方氏と箕輪田氏は祝詞を朗読せられ生徒総代として寺山洲空氏は答辞を朗読し式全く終りて板留村於て祝宴を開かれたりと云ふ</p> <p>南津軽郡同校にては明治19年頃校舍を増築したるも年を追ふて入学生徒の増加ありしたため尚ほ狭隘を感じたれば教員始め有志者は更に広大なる校舍を新築し夫れと同時に方針を一変して開發的の教育を施さんとして目下頻りに奮発し居るよし</p>
---

上の表のように、同小学校には入学生が増加したため校舍を新築したり、教育方針を旧来の寺子屋教育から脱皮させて明治の時代にふさわしいものに改めたりしたことが、東奥日報に再度掲載されている。

かくして、明治から大正にかけ時代にかけて、南津軽郡や黒石地方の政治・経済・文教の面で活躍した多くの人々が黒森山の出身者で占められることになった。

黒森学校の授業は、朝から午後4時頃までであった。休日は、1日、15日、盆、正月、鎮守祭、田植え、丑湯等であった。

教科書は、「いろは歌」「村尽し」「国尽し」「東海道物草状」などを用い、進級につれて「嵯短歌」「孝行短歌」「剣往来」「百姓往来」「文具短歌」「実語教」「童子教」「今川状」「腰越状」「孝経」「千字文」「御制式目」「唐詩選」「四書五経」「文章軌範」と進む。この他に習字もあった。

## 6-2 黒森学校の師匠

黒森学校では様々な師匠がいて、教え方もそれぞれの特徴があったと思われるが、人物ごとに概観をしていく。<sup>5) 6)</sup> (資料2)

### (1) 山崎是空 (やまざきぜくう)<sup>7)</sup>

浄仙寺を開いた人である。黒石市鍛冶町の山崎九兵衛の子として生まれたが、文政7年(1824年)26歳の時、黒石市寺町の浄土宗柴雲山来迎寺良諦の弟子となり、中野不動滝にて修業した。同年黒森山に入って黒石藩主の許可を得、浄仙庵を建立したが、以来50余年一度も下山せずに勤行に励み、明治9年5月6日、76歳で入寂したと伝えられる。黒森山にこもってからの是空は単に自分が修学するのみならず、青年の育成にも力を入れた。地面に字を書いて教えたり、机の傍らに灰が入った箱を置き字を書いて教えもしたということである。自らの求道と、近隣から集まった青少年の育成に専心した。身体も

強健であったが、さらに強靱な精神力で仏道を歩み、名越本山専稱寺（いわき市）から「大蓮社良海上人は空行者」の諡号を受けた。

#### （2）丹羽寂導（にわじゃくどう）<sup>8)</sup>

寂導は黒森山下板留村（現黒石市）の農家の出であり、9歳にて寺入りし、是空から、仏学、儒学の指導を受けのち養子となったが、寺子は黒森山下の諸村のみならず、津軽地区はもちろんのこと、遠く北海道や秋田方面からも入門するものがあり、常に4、50名か100名の寺子がいたといわれている。寂導は、幼少より、よく仏像を彫刻し、一刀彫数千軀に及び広く皆に施したといわれている。人格的にも優れていたとも伝えられている。

寂導は、修行の間に庵の周辺に木を植え池を掘り、近隣の協力も得て畑を開墾するなど、環境整備にも力を注いだ。明治5年に、「浄仙寺」の寺号が許可された。寂導のことは浄土宗内にも伝わり、大本山増上寺（東京都）法主の山下現有は「黒森隠遁遮世塵 浄仙修道八十春 護禅学恵尊持成 今日宗門第一人」の詩文で讃えた。

#### （3）平野寂静（ひらのじゃくじょう）

三代目である寂静は、浪岡の農家の出であり、嘉永元年9月8歳にして黒森山に登ったが、三代住職になったのは明治7年1月であった。私立学校設立に向けて、当時の新聞に募集の公告を掲載するなど、積極的な気質が伺える。荒れた土地の開墾することに精力を注ぐと共に、寺の経営を充実させるなどした。敷地に大講堂を建立するなどしたが、明治28年5月14日に55歳で入寂した。

#### （4）平野妙空（ひらのみょうくう）

四代目の妙空は、黒石の仲町の寺山餅店から出た。寺山久左衛門の次男として生まれたが、13歳の時入山した。平野寂静の弟子となり、明治9年9月に教師補の資格を得て、寺子屋教育に尽力した。41歳で入寂した。

### 6-3 黒森学校の出身者

明治から大正時代にかけて、南津軽郡や黒石地方の政治・経済・文教面で活躍した人の多くが黒森学校の卒業生である。主な人を挙げると、盛治五兵衛（黒石市毛内の庄屋）、鎌田又次郎（旧常盤村福島、旧常盤村初代村長）、成田治（旧浪岡町、女鹿沢小学校校長、女鹿沢村村長）加藤喜久衛（旧和徳村、和徳村村長）、田中源五郎（旧浪岡町、郡会議員）、石岡兵左右衛門（旧浪岡町、女鹿沢村村長）、石村正義（旧浪岡町、杉沢小学校教員、大杉村村長、東北電力浪岡変電所所長）、工藤甚助（旧平賀町、大光寺村村長、松崎・小和森小学校教員）、本間孫吉（大浦村助役、青森市役所書記）、宇野海外（黒石市、弘前中学校卒業後、米国へ留学）、小川元岩手県副知事等、この他にも県外に出て活躍をしている人も多いといわれている。若山牧水も、入門したという説もあるが、立ち寄っただけである。

## 7 考察

黒石市の寺子屋の多くは、学制後に小学校に吸収される形で姿を消している。しかし、黒森学校は、寺子屋として地域の教育を担っていたが、学制以後もしばらくの間存在しているのは地域的な要望等を受けていたように思われる。また、寄宿制をとっていることから一貫した教育がなされていた。黒森学校の師匠は、僧侶が何代かにわたって教えているが、宗教的な面を含んでいるにせよ、黒森学校からさらに東奥義塾に進む人がいたように、

幅の広い地域の学校としての役割をしていたように思われる。

また、黒森学校で学んだ人の中から、地方において活躍した政治家等がかなり出ていることや他の県からも黒森にやって来る人も多く、学校の存在意義大きかったものと思われる。

僧侶が教え、段階的な養育等を基本としていたが、教育の目指すべき全体像を持っていた。そのためそれに基づく形で教育が行われているとともに社会にすぐに役立つ教育がなされていた。教育内容も、社会に役立つように読み書き算盤を基本とし、礼儀作法や道徳など基礎的・基本的事項の習得の重視は、現代の教育にも通じることが多いように思う。

## 8 まとめと今後の課題

昭和19年の本堂の焼失により、黒森学校は多くの貴重な資料を失い当時の様子を知ることが容易ではない。しかし、当時を語り継ぐ人も稀少ではあるが存在している。その人達から話を聞くことで、黒森学校の研究をさらに進めることができると思われる。

また、青森県内の小学校の中で、研究発表会等で研究テーマを基礎・基本を重視しながらも、副題に「よみがえれ寺子屋教育」と寺子屋の言葉を入れて取り組んでいる学校もある。これは、寺子屋教育で行った基礎的・基本的な事項の徹底を目指すものであり、今の教育に通じるものである。

黒森学校についてのさらなる文献及び聞き取りを行うことがこれからの課題として挙げられる。

## 引用文献

- 1) 青森県教育史編集委員会(1970); 青森県教育史 第1巻 記述編, 青森県教育委員会, pp. 258-261.
- 2) 黒石市史編修委員会(1987); 黒石市史, 黒石市役所, pp. 335-336.
- 3) 鳴海静蔵(1962); 黒石百年史, 黒石市役所, p.100.
- 4) 文部大臣官房報告課(1892); 日本教育史資料8, 文部大臣官房報告課, pp. 701-702.
- 5) 村上真完(1990); 津軽の残照, じゅうがつ社, p.100.
- 6) 組本社(1992); 人づくり風土記(2) 青森, 農村漁村文化協会, pp.210-211.
- 7) 稲葉克夫(1991); 黒石人物伝, 黒石市教育委員会, pp.34-44.
- 8) 佐々木高雄(2002); 青森県人名事典, 東奥日報社, pp.535-707.

## 参考文献

- 1) 前野千代治(1958); みちのく双書青森県教育史上, 青森県文化保存協会, p.101.
- 2) 青森県高等学校地方史研究会(2007); 青森県の歴史散歩, 山川出版社, p.84.
- 3) 佐藤健一(1996); 江戸の寺子屋入門, 形成社, p.10.
- 4) 山上笙介(1985); 弘前市史(上), 津軽書房, p.100.
- 5) 山上笙介(1985); 弘前市史(下), 津軽書房, p.120.

註: 資料1) 東奥日報社, 明治22年5月2日朝刊, 弘前市立図書館.

資料2) 村上真完, 「津軽の残照」, じゅうがつ社, PP269-272.

●黒森山の小学校 南津輕郡黒森山に在る淨仙寺にては徳来より子弟と開帳しを勉めしか去る明治十一年小学校を設け益々教育に從事せしが二十一年尋常設置小學區域改正の爲め廢せられたれとも資力乏くして學校を設けざりしか今回該山住職平野寂靜氏奮發尽力して私立學校を設くるの許可を得本日の廣告にもある如く去月廿八日開校式を行ひ全部長土方氏と箕輪田氏ハ祝詞を朗讀せられ生徒惣代として寺山洲空氏は答辭を朗讀し式全く終りて板留村に於て祝宴を開かれたりと云ふ

廣告

今般私立學校許可去月廿八日開校式と執行せり  
 南津輕郡南中野村  
 黒森山淨仙寺住職  
 私立小學校設立者  
 五月  
**平野 寂靜**

黒森山淨仙寺代古経歴年明治二十二年 第五世の経歴の如し、それと併し同寺は浄仙寺に遷したる事あり

●黒森山淨仙寺開基已承代経歴  
 南津輕郡黒森山淨仙寺開基  
 淨仙寺開基已承代経歴

●山崎是空  
 折当寺開基已承代経歴  
 山崎是空  
 折当寺開基已承代経歴

●丹羽寂道  
 丹羽寂道  
 丹羽寂道

●平野寂靜  
 平野寂靜  
 平野寂靜

●第五世平野明親代  
 第五世平野明親代  
 第五世平野明親代

●第四世平野刹空  
 第四世平野刹空  
 第四世平野刹空